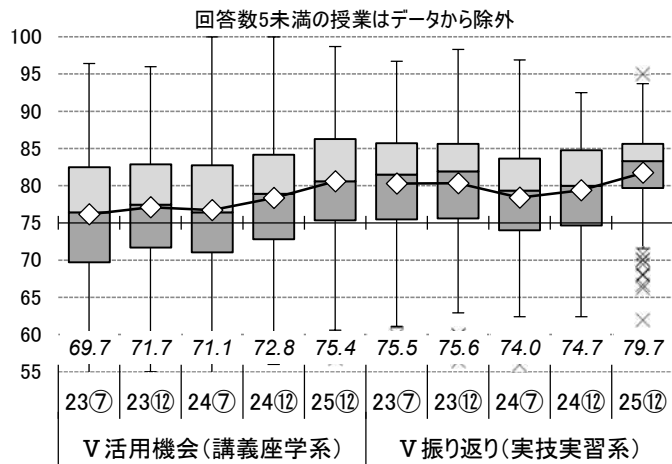


Ⅶ学習効果が75ポイント（肯定的な回答が概ね9割を占める水準）以上に到達した授業の割合は、全校で77%（講義座学系74%、実技実習系86%）です。一昨年12月の60%、昨年の64%と比べても大きく向上しています。両系統とも、中高双方で昨年の実績値を有意（授業別集計値によるt検定片側P値<0.05）に上回りました。Ⅶ学習効果への大きな寄与度が確認されているV活用機会とV振り返りの集計値分布（直近5回の推移）は右図の通りです。箱の位置は確実に高くなり、学校全体で改善が進んでいる様子が見て取れます。箱の下端（プロットエリア内下段に値を表示）に届かない授業では、キャッチアップを急ぐ必要がありますが、校内には做すべき実践が豊富に存在します。まずは各教科内で、工夫と成果の可視化・共有を加速させましょう。



優良実践の共有をシンプルなグループワークで

<https://fn-officef.com/blog/202507/24545/>

高い評価を得たからには、何らかの理由があります。きちんと振り返って、自らの取り組みと効果を整理していきましょう。そこで得た結果はメモに起こし、各教科内で閲覧しましょう。紙での共有は口頭での発表より効率に勝りますし、読んだ所感を付箋等書き出し、元のメモに貼り込んでいけば、すべての先生が考えるところ（感想、意見、参考事例など）も教科内でシェアできます。付箋を介した「気づきの交換」は、指導法に新たな発想をもたらすはず。メモが戻ってきたら、付箋のコメントを読み、更なる改善に向けて発想を整理しましょう。

授業評価アンケートなどのデータを用いて「優れた実践」の所在を特定

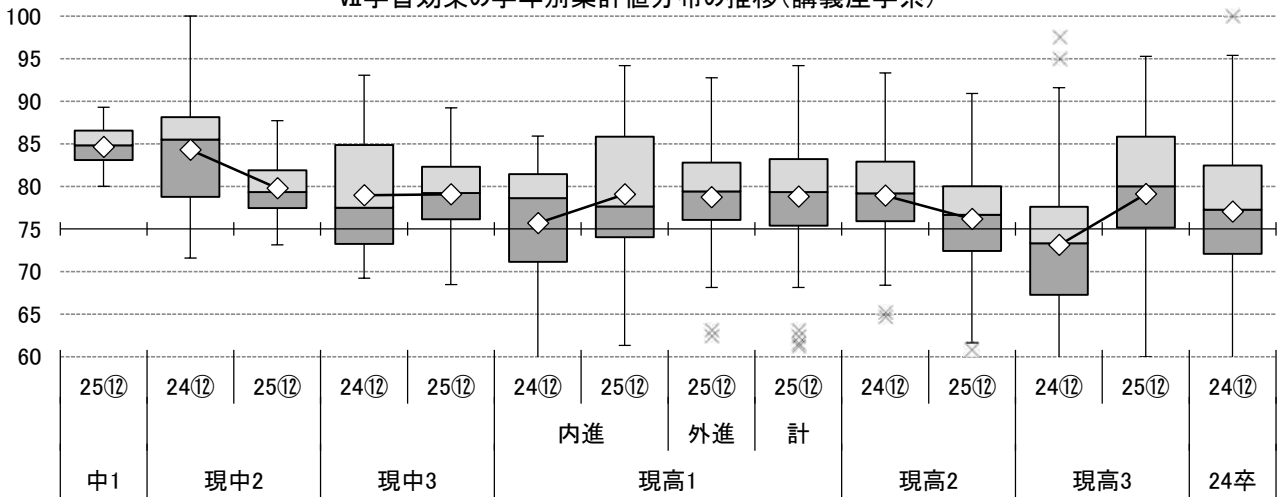
授業者に高評価を得た工夫と効果を得た理由をメモに起こしてもらう

教科でメモをグループ内で回し読み。コメントや質問は付箋に書いて貼付

回覧を終えたら、付箋のコメント等を読んで、気づきを整理・再言語化

まとめ直したメモを再度教科で共有。→興味を持ったら教室を訪ねて参観

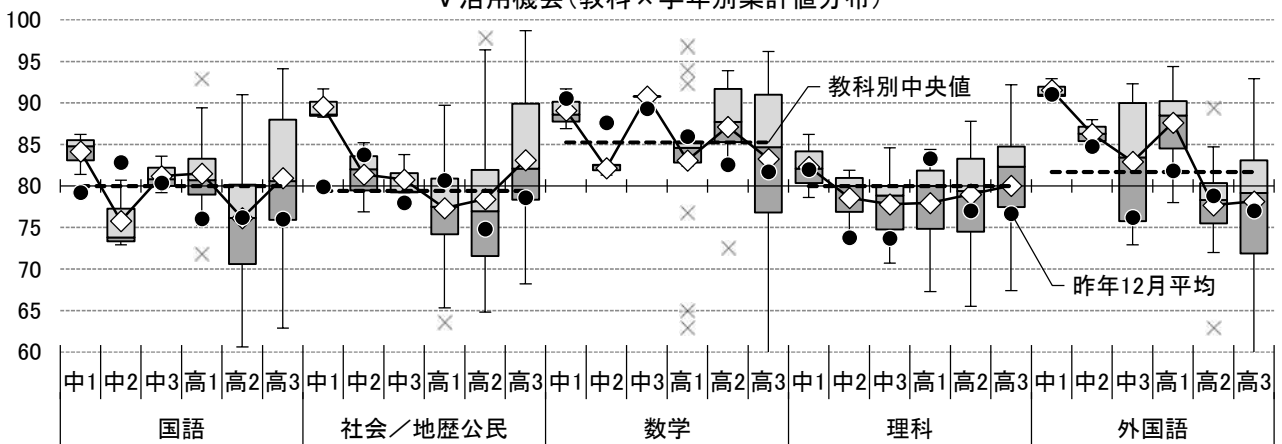
Ⅶ学習効果の学年別集計値分布の推移(講義座学系)



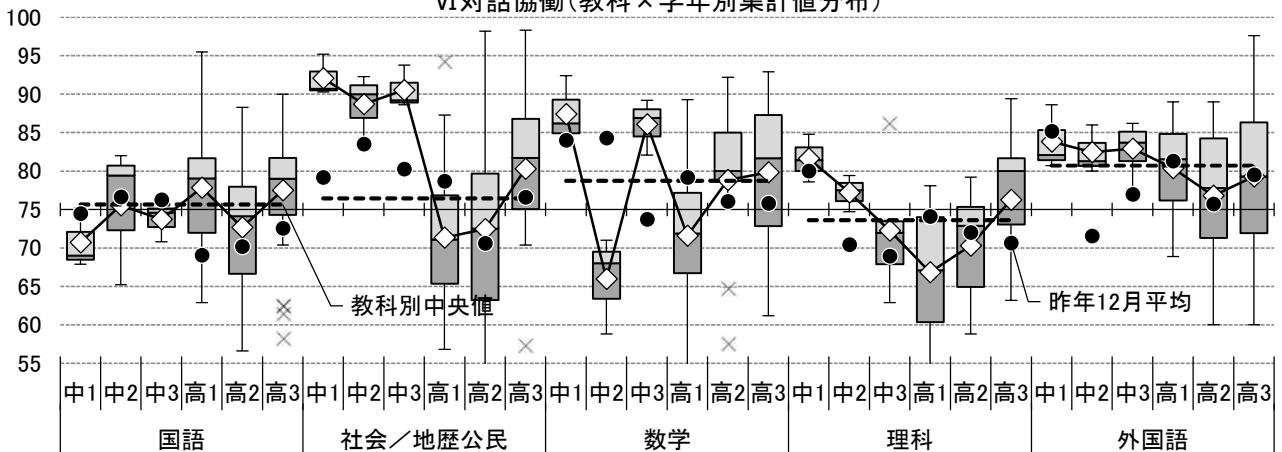
講義座学系で、一つ上の学年の1年前を、授業別集計値の平均で有意に上回ったのは中3、高2、高3の各学年です。中1も良好なスタートです。中2は現中3の1年前と平均値は同水準ですが、1年前の1年時12月と比べたときの後退が目立ちます。高1は現高2の1年前とほとんど変わりません。内進では授業間の差がやや大きめにしています。Ⅶ学習効果への寄与度（Ⅰ～Ⅵを説明変数とする重回帰分析[決定係数 0.88]で推定)のトップはⅤ活用機会とⅥ対話協働でした。両項目の{教科×学年}の集計値分布は下図の通りです。実践の共有を進めることで、箱を短く、高い位置に揃えていきましょう。

・授業で使った教材・課題や考査問題の引き継ぎ (<https://fn-officef.com/blog/202401/2535/>)

Ⅴ活用機会(教科×学年別集計値分布)

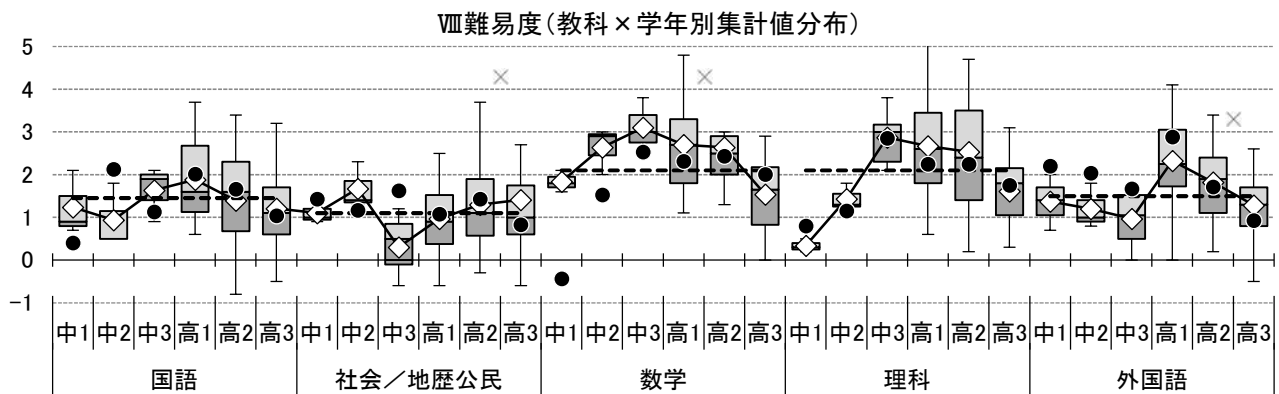


Ⅵ対話協働(教科×学年別集計値分布)

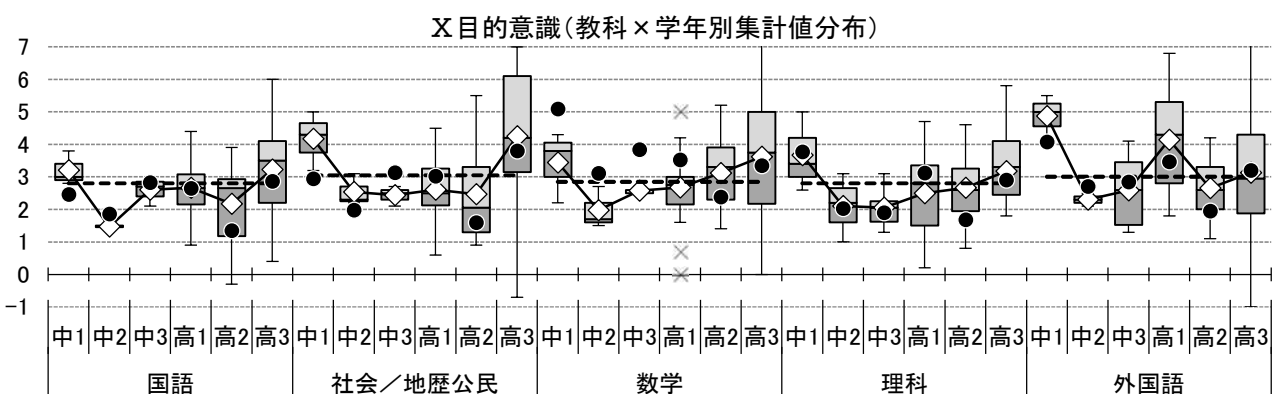
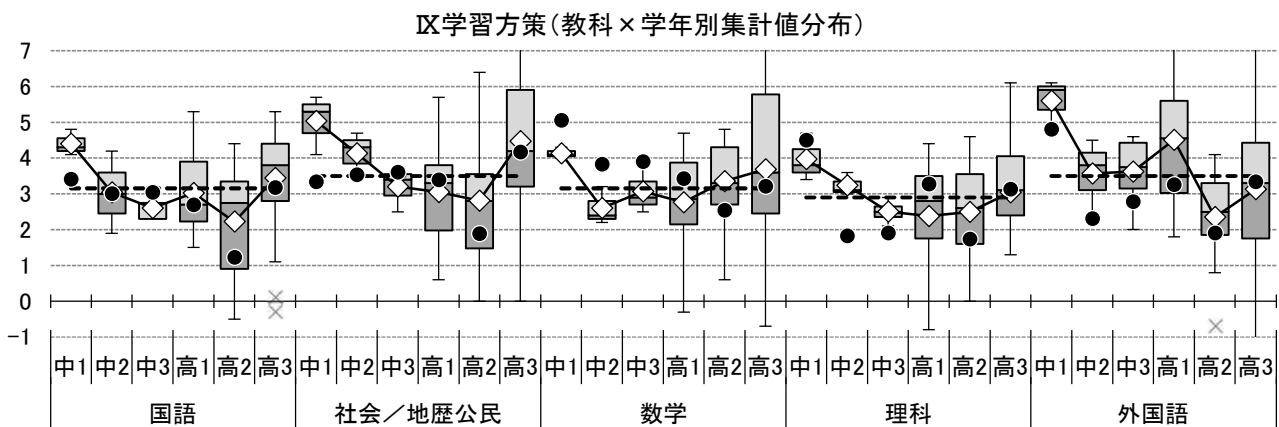


学年間の円滑な学びの接続を実現するには、Ⅶ難易度も適正範囲（通常は+2.0～+2.5。Ⅸ学習方策とⅩ目的意識が高まっていたら、さらに上方にシフト）に収めるように、各教科での調整が必要です。ある時期に難易度を抑え過ぎると、進級を境に大きな段差を経験させることにはり、学びに躓きが生じがちです。また、以前も申し上げた通り、学習内容が高度化する局面では、教え合いなど、不明の解消を図るすべを確保させることが肝要です。参照型副教材の活用法にも、それまでに習熟させましょう。

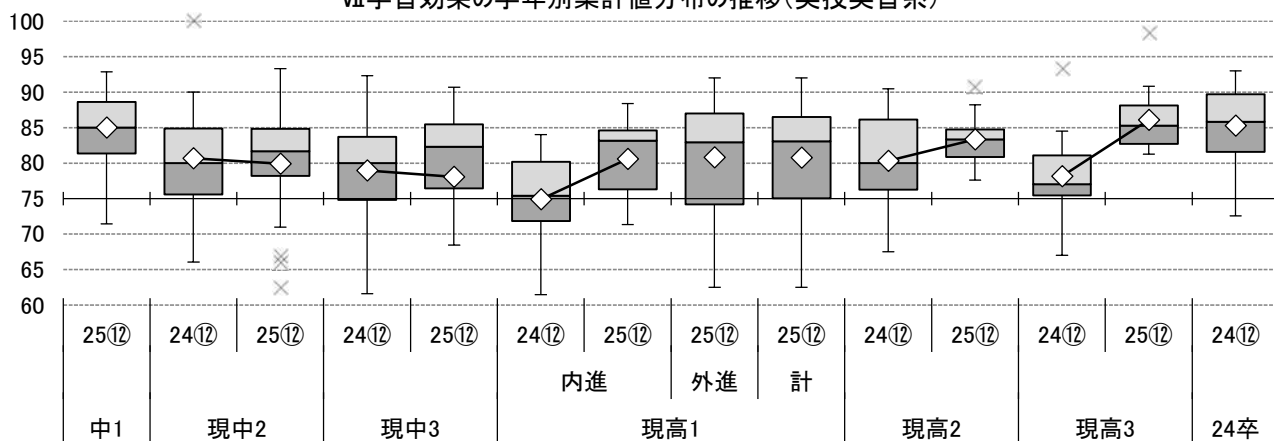
- ・活動性が苦手意識を抑制する機能とその限界 (<https://fn-officef.com/blog/202412/2419/>)
- ・負荷を高める／抑えるための様々なアプローチ (<https://fn-officef.com/blog/202209/9496/>) 再掲



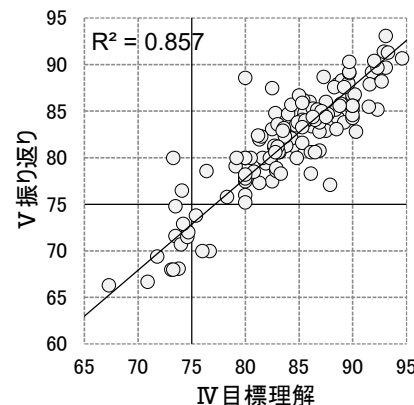
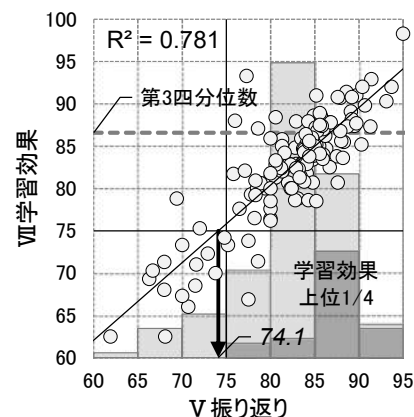
Ⅸ学習方策とⅩ目的意識の改善には、ガイダンス等の充実を図るよりも、学習活動（課題解決や対話協働）に取り組ませる度にきちんと「振り返り（右参照）」を行わせ、「より良いパフォーマンスを得るために必要なこと」（改善課題）を捉えさせ、それを「次の機会における自分の目標」に設定させていくことに注力するのが好適です。



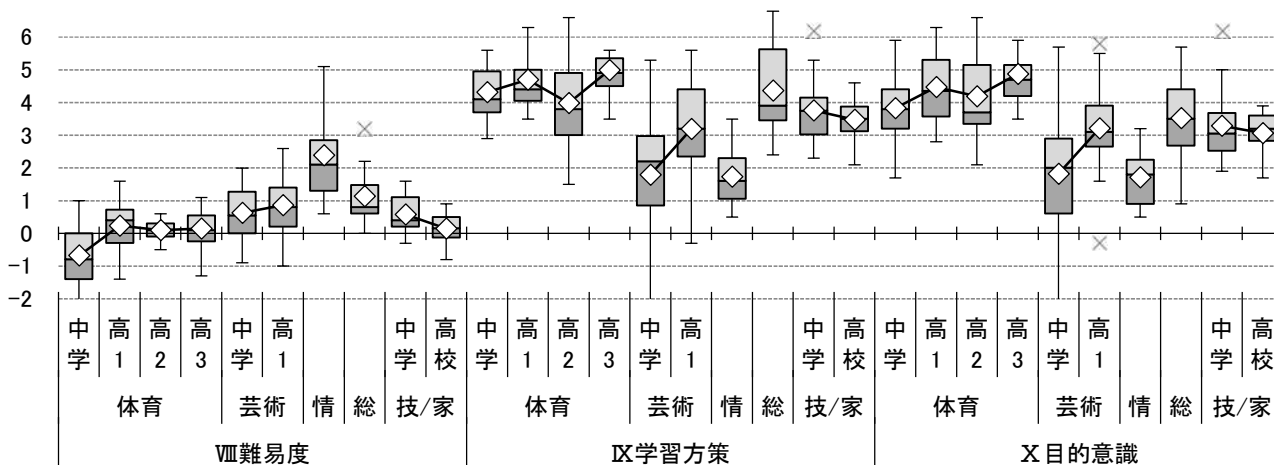
Ⅶ学習効果の学年別集計値分布の推移(実技実習系)



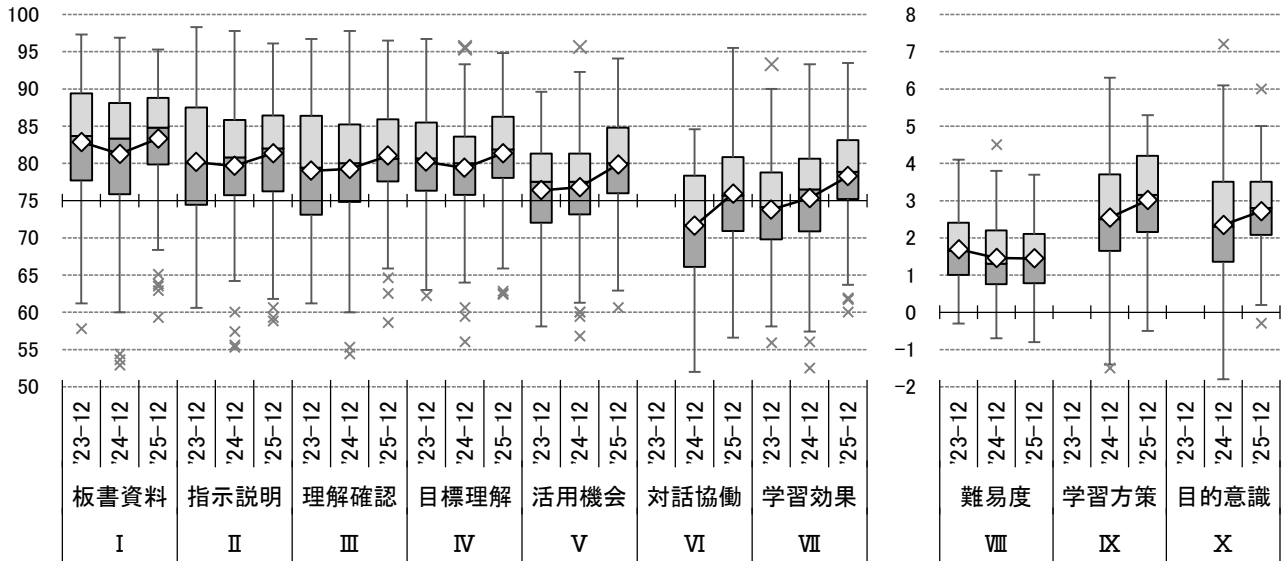
実技実習系も過年度を大きく上回りました。中央値はどの学年でも80ポイントを超えており、良好と言えます。中2、中3、高1外進では分布の尾がやや長くなっていますが、教科内あるいは学年内他教科の授業を参考にキャッチアップを進めていきましょう。右の散布図(回答数5未満の授業は非表示)に見る通り、{Ⅶ学習効果 \geq 80}ならば、{Ⅴ振り返り \geq 80}もほぼ確実に期待できます。Ⅴで改善が遅れた授業では、まずはⅣ目標理解の向上が先決です。観点別の評価基準をアウトプット(成果)とプロセス(取り組み方)について示すことで、質問文(Ⅳ)の求めるところを満たしていきましょう。また、下図に見る通り、Ⅷ難易度はほとんどの授業で余裕を残します。身体能力や技能の発現としてのパフォーマンスで、これまで以上の要求を課すのでは、目標の達成が難しくなります。「思考や判断の力」の要求水準で難易度の調整(<https://fn-officef.com/blog/202508/24984/>)を図ることも検討していきましょう。要求水準を多角的に設けることで負荷の適正化を図る手札を増やせます。Ⅸ学習方策とⅩ目的意識は、{Ⅴ振り返り \geq 80}のときに回帰式の値はいずれも+3.0前後です。この水準を下回る場合、講義座学系(前掲)と同様、「次に向けた課題形成と目標設定」を意識させた上で、振り返りを徹底させましょう。



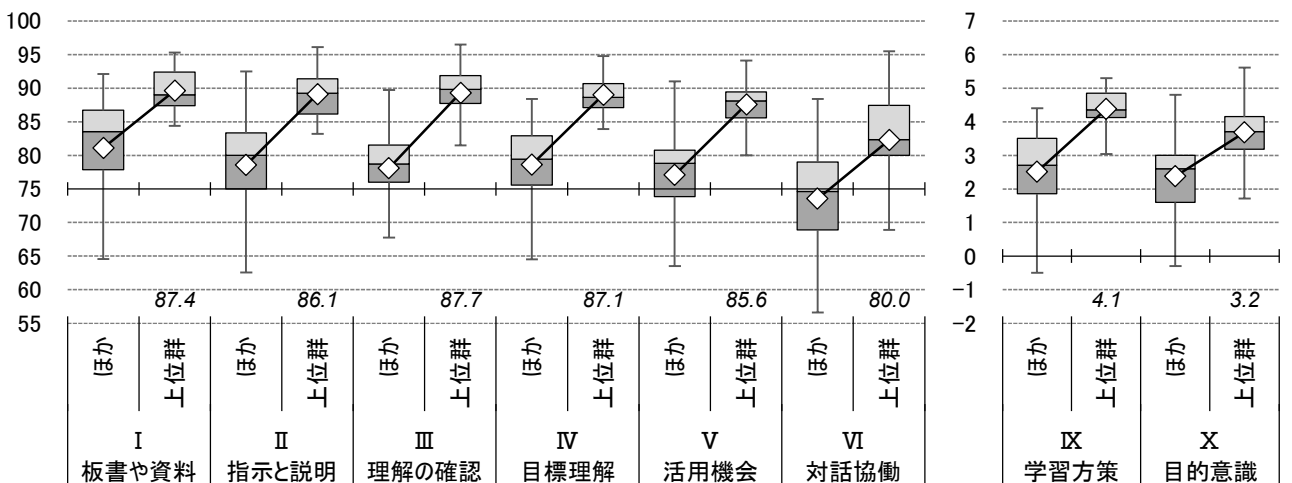
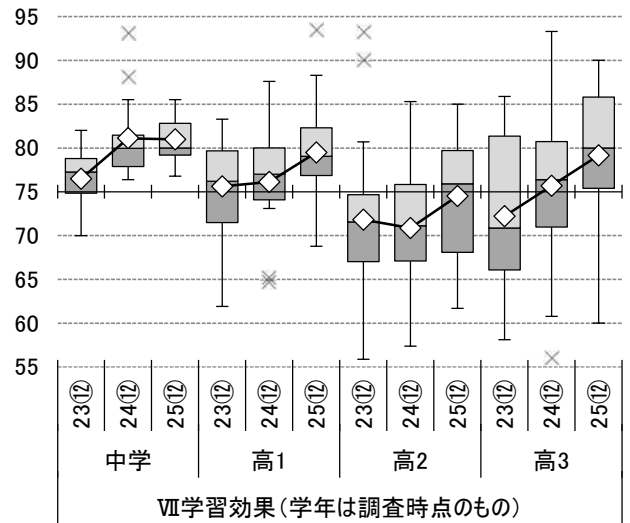
・生徒は「振り返り」を効果的に行えているか (<https://fn-officef.com/blog/202308/14810/>) 再掲



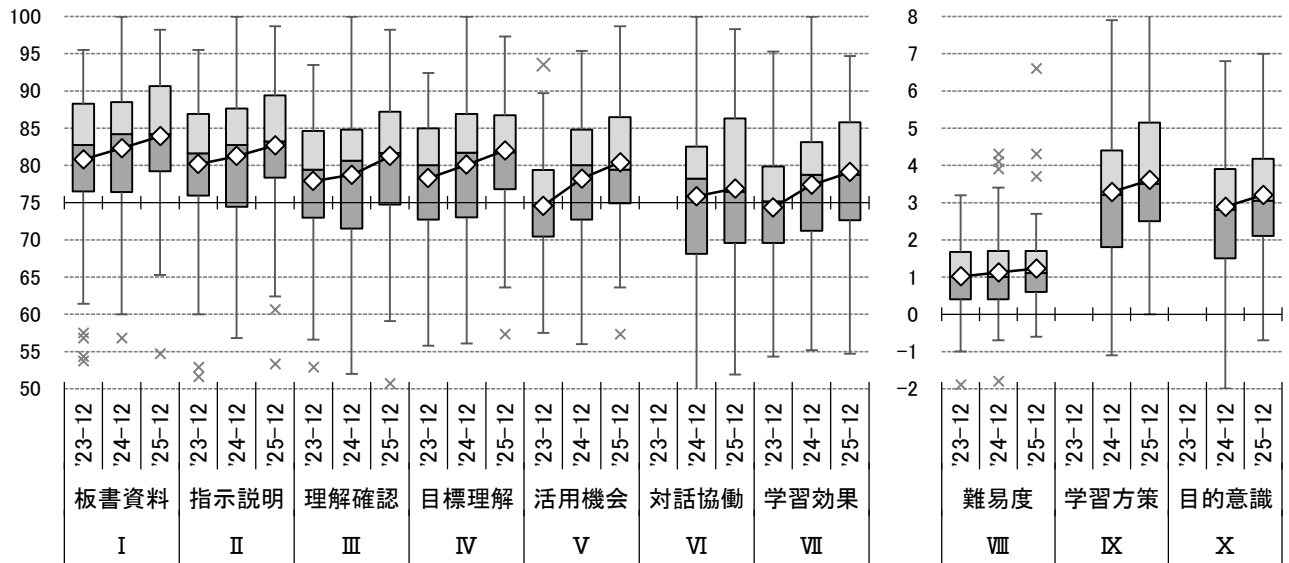
国語



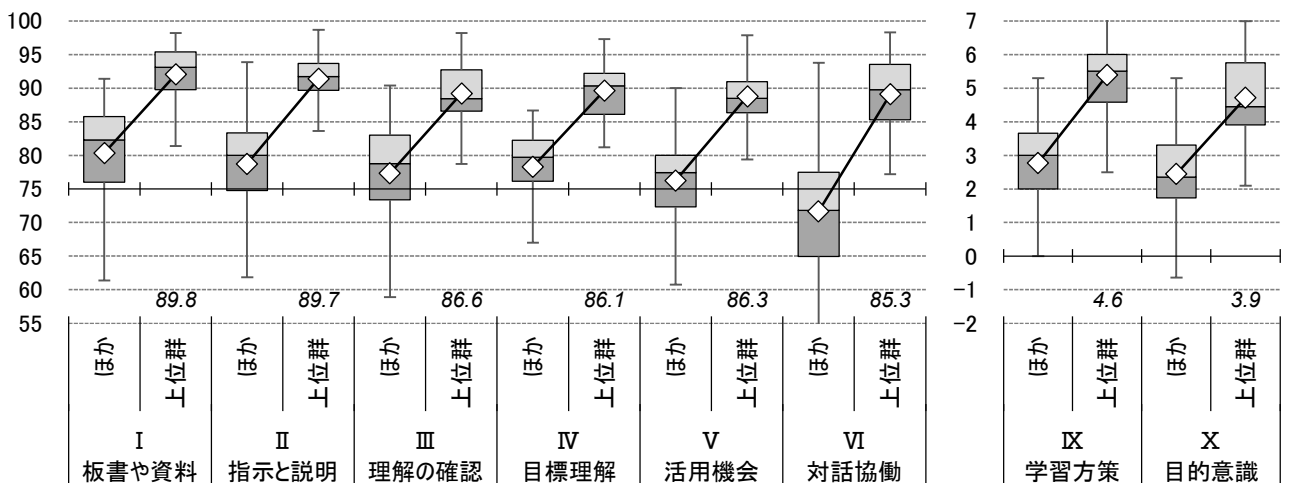
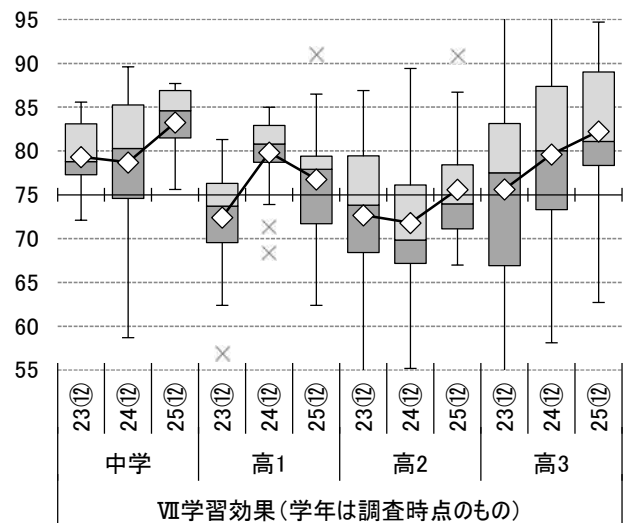
VII学習効果の75ポイント到達率は79%（一昨年47%、昨年59%）です。V活用機会とVI対話協働で改善が進み、VII学習効果を押し上げたように見受けられます。I～IVの各項目も昨年までを超える評価を得ています。IV目標理解（VIIへの寄与度は他教科以上に大きく、V活用機会に続く第2位）で75ポイント未満に止まる授業のほぼすべてが{VII学習効果<70}です。教科の特性上、言語活動の充実は優先順位の高い課題です。目指すところとプロセスにおいて留意すべきことへの認識が不十分では、活動が自己目的化しがちです。活動の成果（V活用機会として設定した問いへの答えなど）に加え、取り組みそのものを評価／採点する基準をルーブリックの形で明示することも検討しましょう。右図を見ると、高2で未到達（75ポイント未満）が多く残ります。前掲（p.2）の通り、V活用機会とVI対話協働の双方で箱の下端が低い位置にあることが、低調の原因の一つと思われます。学年教科内の優良実践のみならず、隣接学年の関連科目での取り組みも参考に改善を進めていきましょう。中学は負荷の不足に加えて、V、VIの箱の位置の段差（学年間）が気になります。



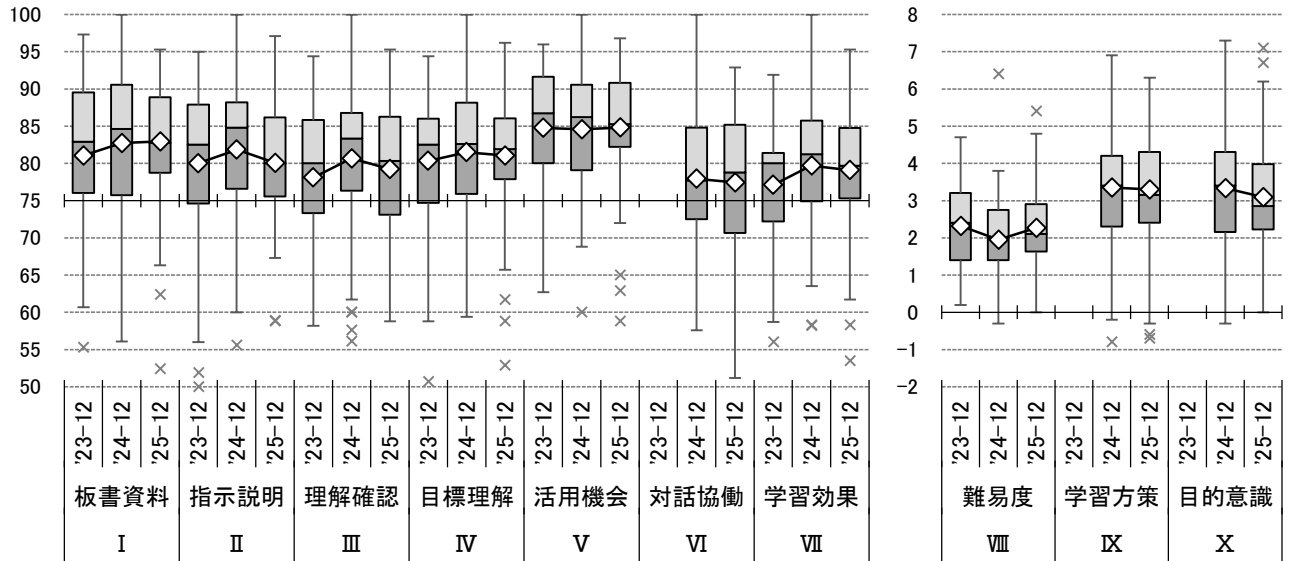
社会、地歴・公民



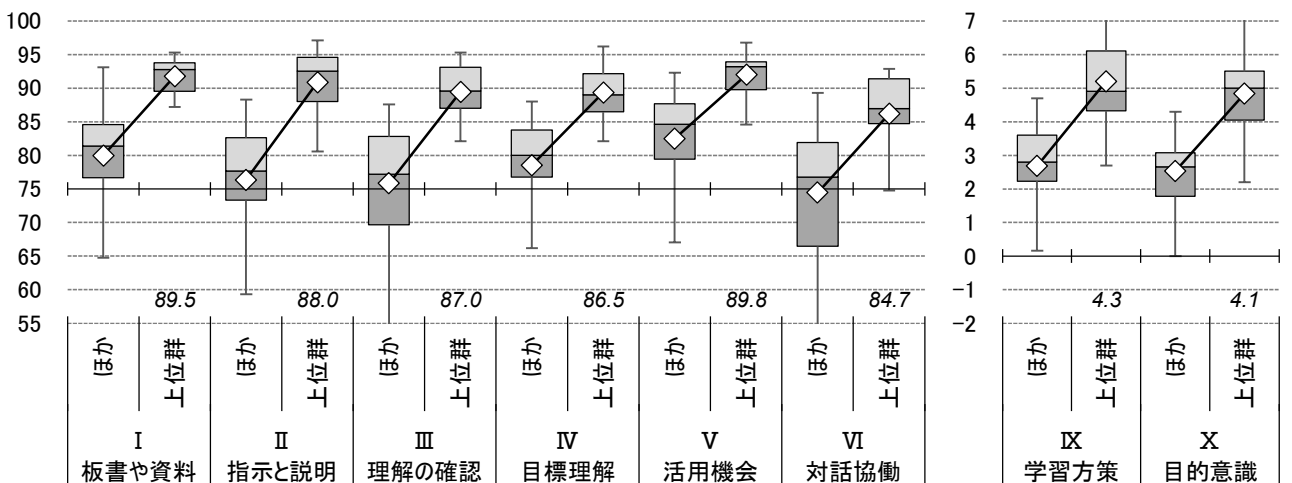
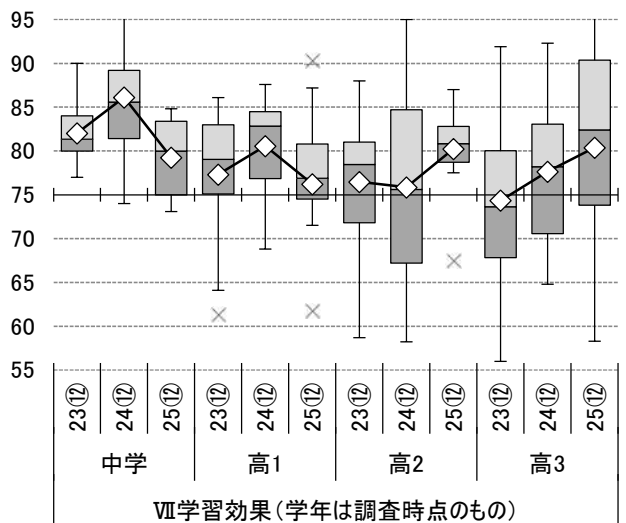
VII学習効果の75ポイント到達率は66%（一昨年52%、昨年61%）です。平均値（VII）は続伸しており、教科全体で改善が進んでいる様子が窺えますが、下方のひげは依然として長く、キャッチアップが遅れている授業（<https://fn-officef.com/blog/202408/4231/>）が少なくないようです。授業間の差が比較的大きく残っているのは、VI対話協働（四分位範囲は16.7）とIII理解確認（同12.5）です。これら2項目だけを説明変数とする重回帰分析（目的変数はVII）の決定係数は0.82に達します。優れた実践の共有を図る上で焦点に据えるのが好適です。問いを投げ掛け、生徒に思考させ、その結果と過程を生徒間で言語化させれば、その様子を観察することで理解の確認もできるはずで、授業案を考えるときに「流れ」を一つしか考えていないと、観察を通じた理解把握をしても、それを反映した学ばせ方への切り替えが行えません。様々な状況を想定し、修正案も考えて教室に臨むようにしたいところです。右図で高1と高2は箱の下端（VII）が低めです。前掲（p.2）の通り、V活用機会とVI対話協働に改善の余地が残ります。高1は昨年度の実践も参考にしましょう。



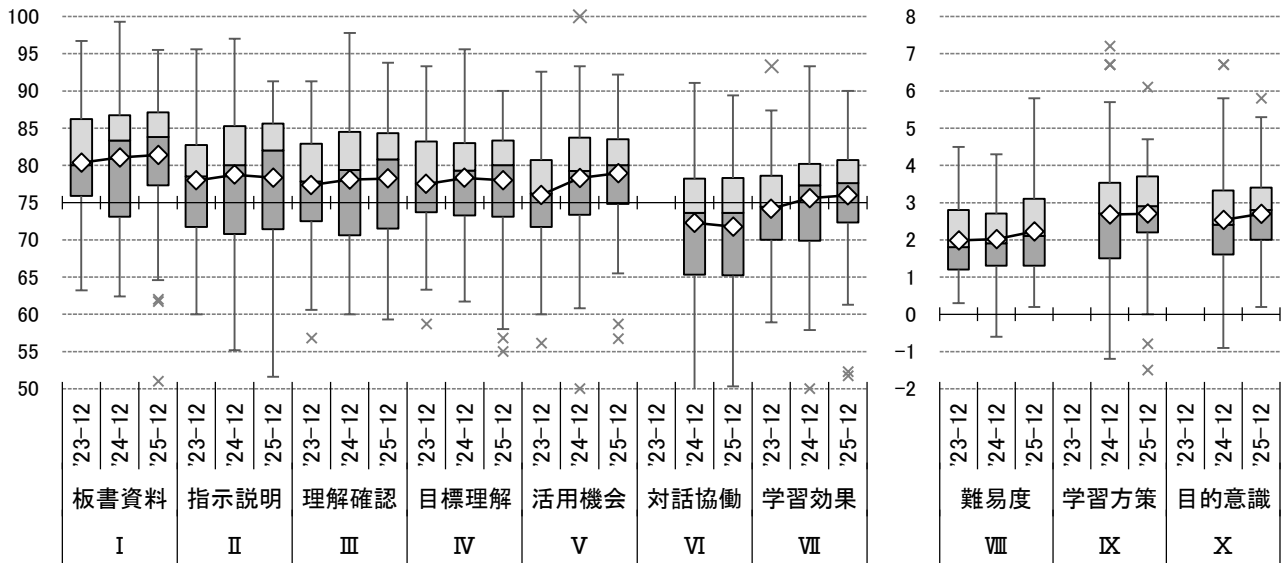
数学



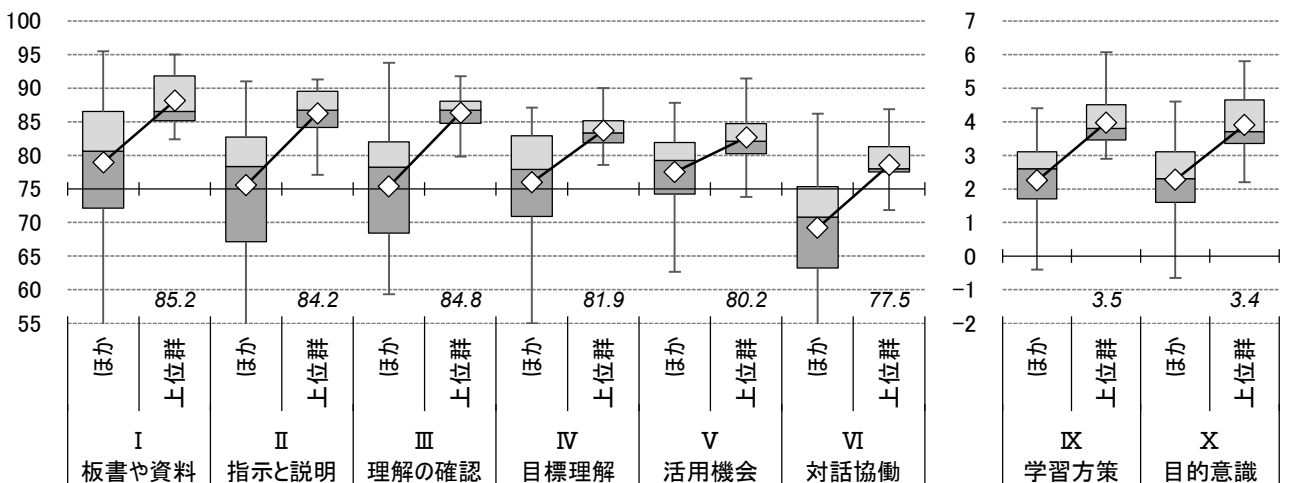
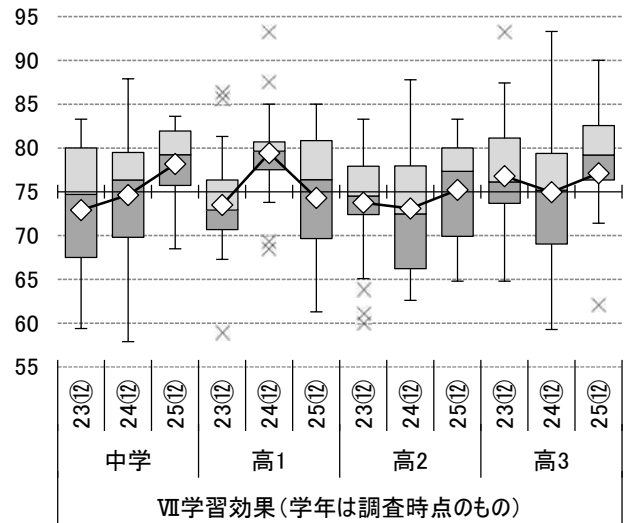
VII学習効果の75ポイント到達率は78%（一昨年69%、昨年75%）です。中央値や平均値には小幅ながら低下が見られます。II指示説明とIII理解確認の後退は、課題解決や対話協働における思考の土台を不確かにします。箱の下端（II、III）に届いていない場合、改善は急務です。拙稿「説明がわかりにくいと言われたら」(<https://fn-officef.com/blog/202407/2501/>)もご参照下さい。IIIと関連して昨年も改善課題の一つに挙げたVI対話協働では、分布の尾が長くなり、改めて優れた実践の共有に力を入れる必要がありそうです。繰り返して恐縮ですが、「問い掛けを起点とする思考の言語化」を生徒間で行わせるようにすれば、その場での不明の解消も進みますし、やり取りを観察する中で躓きの所在も捉えられます。前掲(p.2)の通り、学年間での段差(VI)も大きくなっており、「学年間の円滑な学びの接続」を実現するためにも、隣接学年での取り組みも参考に改善を進めて行きましょう。IX学習方策は教科全体での箱の位置は昨年と変わりませんが、学年ごとに改善と後退が混在(p.3)しています。振り返りに力を入れて、学習の改善を図らせていきましょう。



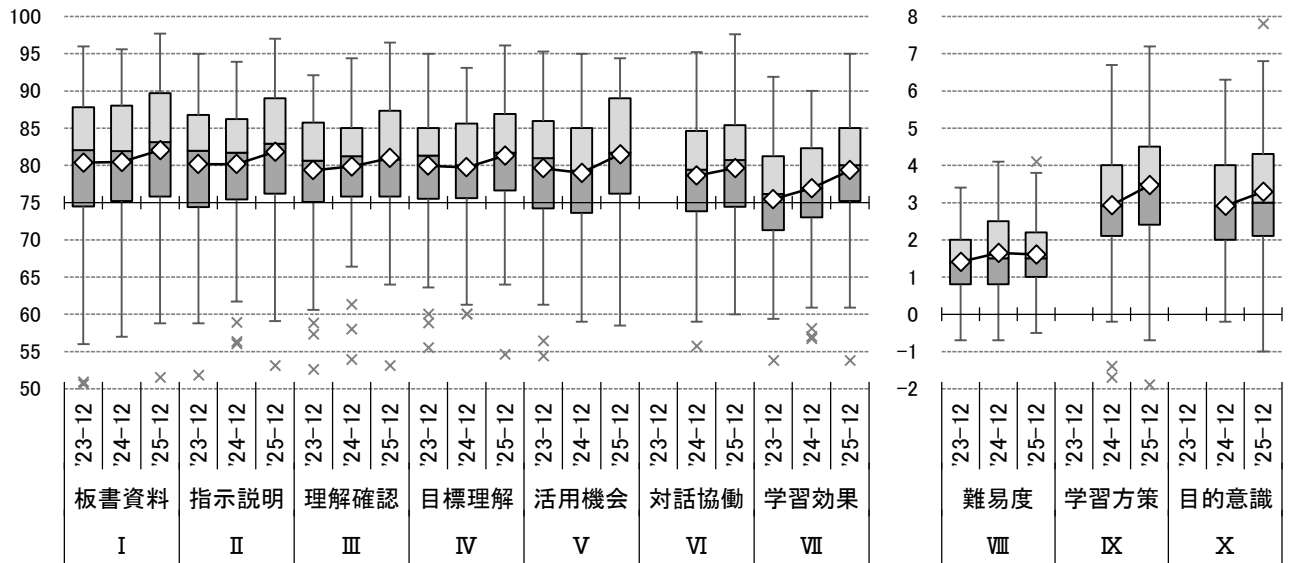
理科



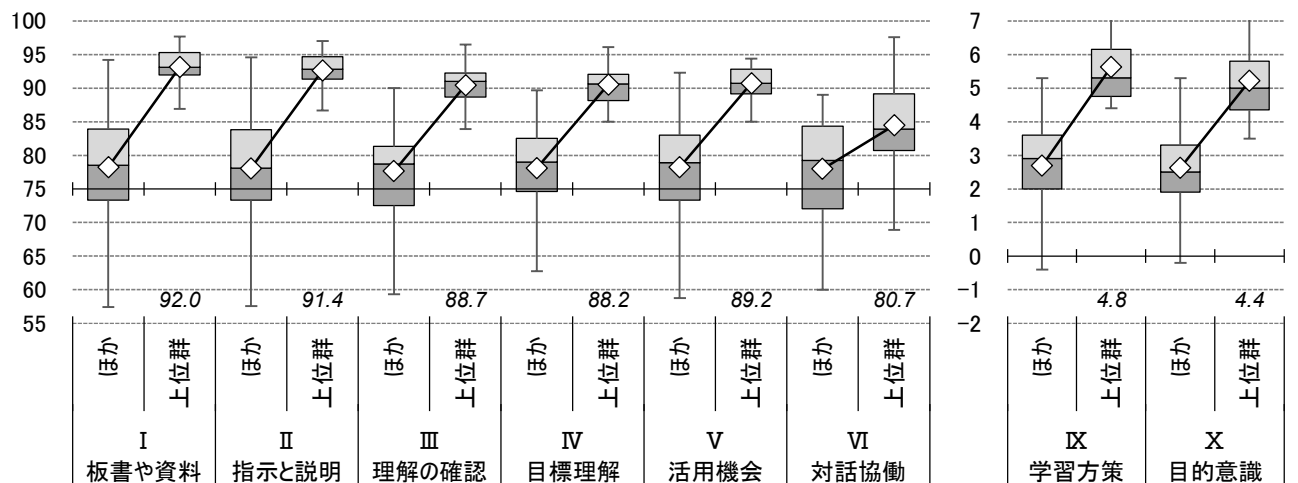
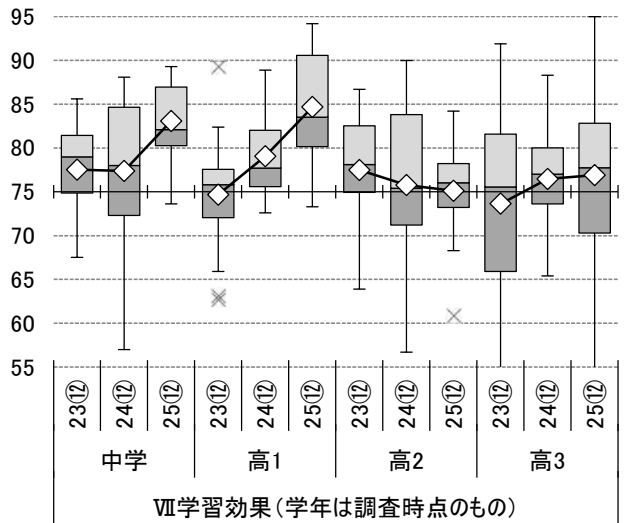
VII学習効果の75ポイント到達率は69%（一昨年46%、昨年59%）です。中央値（VII）に変化はないものの、箱の下端が上昇しました。V活用機会での改善と、それを起点に生じたと思われるIX学習方策とX目的意識の向上が、VII学習効果を押し上げたものと思われます。学習方策は課題解決を通じて養われます（<https://fn-officef.com/blog/202411/2587/>）し、目指すところ（＝解くべき課題）が明確になれば、そこへの到達に向けた「自分の課題や目標」も設定しやすくなります。一方で、前回の分析で改善課題に挙げたI～IIIの各項目の内、II指示説明とIII理解確認は中央値未達の分布が長く、一部に改善の遅れが目立ちます。理解の確認を丁寧に行い、不明の発生（伝達の不備）がどこにあるかを捉えて、改善を進めていきましょう。III理解確認に不足を抱えている授業の大半が、VI対話協働でも改善の余地を残しています。先生の説明がわかりにくいところで生徒の学びを止めさせないよう、問い掛けを通じて思考させた結果と過程を、生徒間で言語化させ、理解の相互補完（+先生方にとっては観察）の機会を確保することに改めて取り組んでいきましょう。



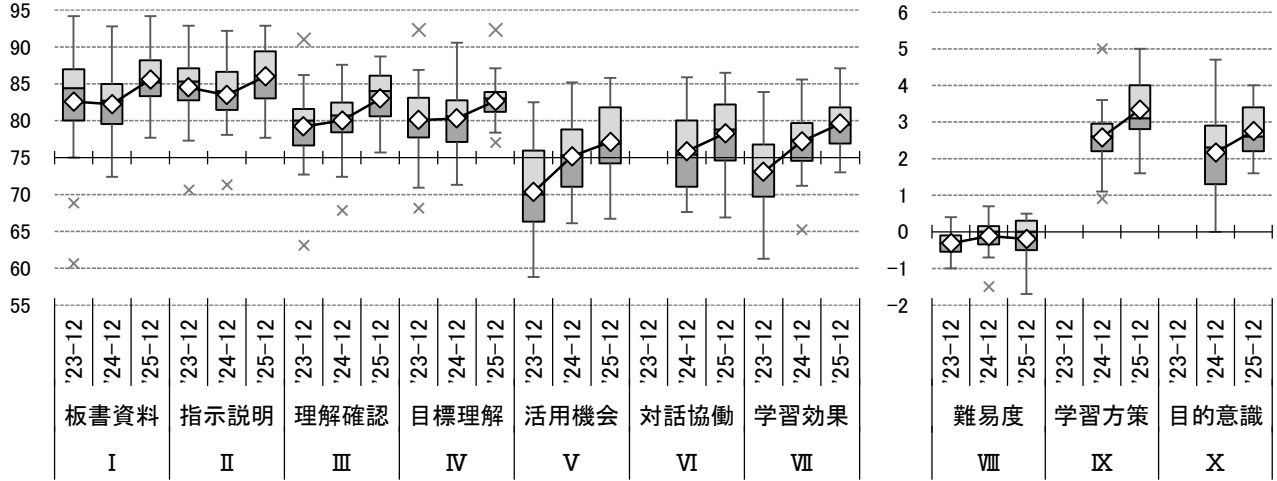
英語



VII学習効果の75ポイント到達率は76%（一昨年64%、昨年67%）です。箱の位置は連続して高まってきており、改善が進んでいる様子が窺えます。I～IV、VIの各項目も昨年と同等以上の評価を得る中で、V活用機会に有意（授業別集計値におけるt検定）な改善が観察されました。前掲（p.2）の通り、中3と高1の伸び（V）は大きく、今期の取り組みは着実に記録に残し、次年度以降のさらなる改善の土台にしたいところです。高2と高3には、V活用機会とVI対話協働の双方で、改善の余地を残す授業が一定数含まれています。IX学習方策とX目的意識も昨年度以上です。生徒の負荷耐性も高まっていることが想像されますので、VIII難易度で中央値を下回っている授業では、要求水準をもう少し高める必要があります。平均値が適正範囲（VIII）にあるのは高2だけです。タスクを入れ替えるよりも、その出来栄や取り組みの過程（行動）を評価する「基準」をアップデートするのが好適です。課題などであればその採点の基準、言語活動であれば行動評価の基準を、ルーブリックの形に整えることで、生徒に「一つ上の段階」をイメージさせていきましょう。

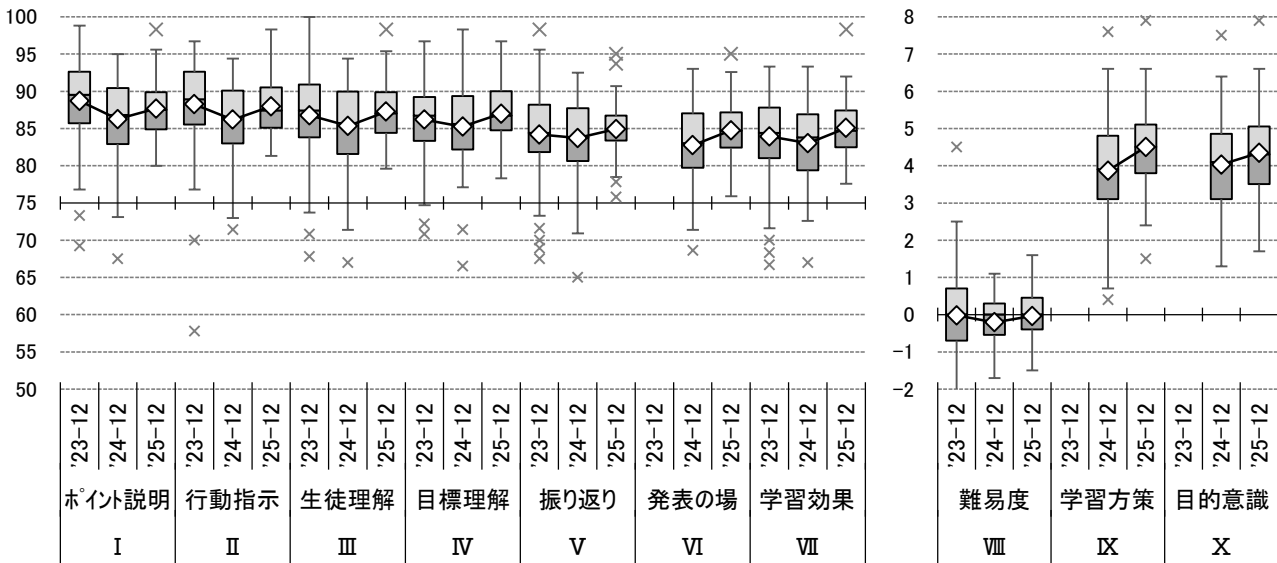


保健

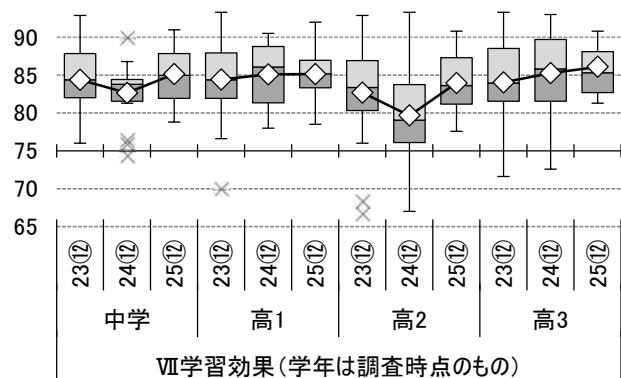


VII学習効果の75ポイント到達率は95%（一昨年35%、昨年65%）です。大きく評価が伸びています。I～IVの各項目は授業間の差異もなく、良好な評価です。V活用機会とVI対話協働では中央値以上の授業の実践を可視化・共有できれば、次年度のさらなる向上にむけた土台になります。IX学習方策とX目的意識も改善が進みました。学習活動（課題解決や対話協働）に取り組ませた後の振り返りには、引き続き力を入れましょう。残る課題は適正負荷の実現（VIII）です。学んだことの中に「問い」を見つけさせ、その解明／探究に取り組ませる (<https://fn-officef.com/blog/202510/25893/>) のも好適です。

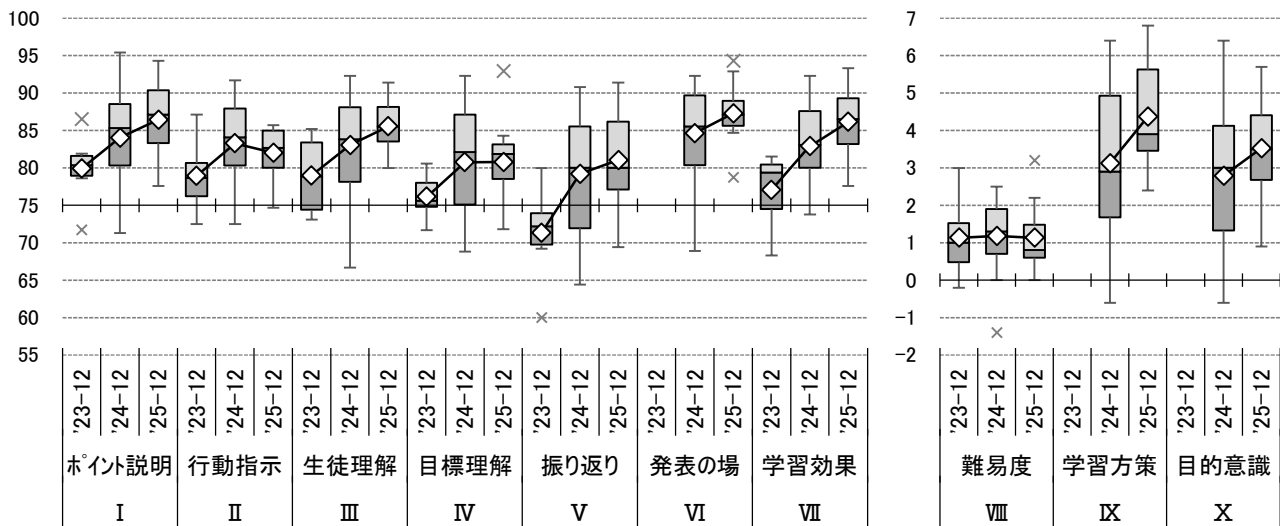
体育



VII学習効果の75ポイント到達率は100%（一昨年96%、前回は92%）です。教科全体で非常に良好な評価を得ています。I～VI、IX、Xの各項目にも教科を挙げて取り組むべき改善課題はなさそうです。右図の通り、校種・学年間の差もほとんどありません。一方、VIII難易度にはまだ余裕が残ります。前掲の記事（p.4）もご参考に、「思考や判断の要素」での要求水準も負荷調整の手札に加えてみましょう。

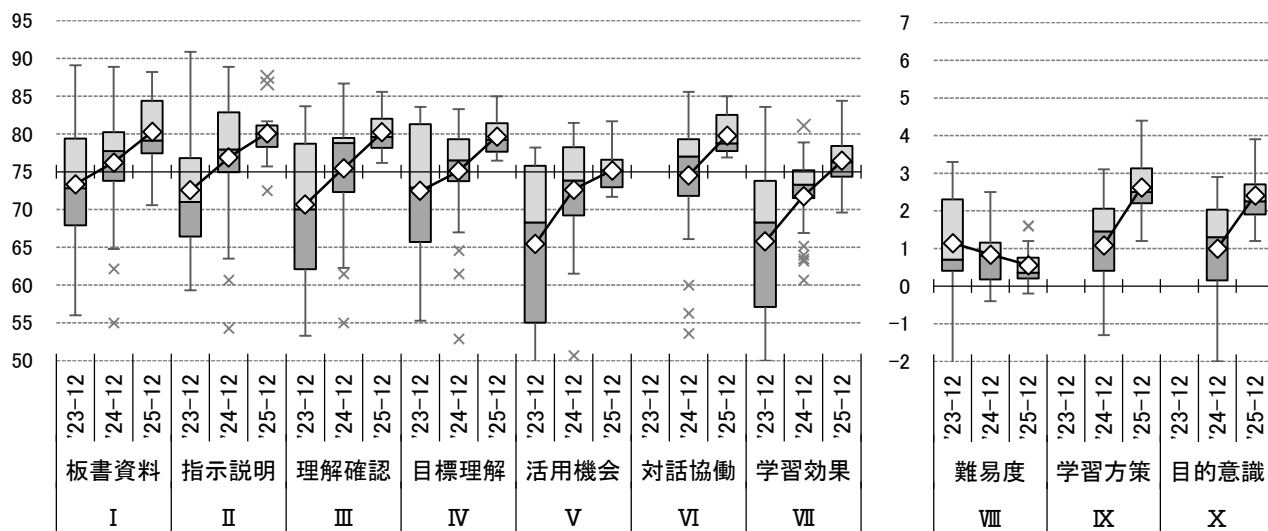


総合学習（ケンブリッジ英会話）



Ⅶ学習効果の75ポイント到達率は100%（一昨年67%、昨年94%）です。各項目とも大きく改善が進んでいます。Ⅸ学習方策、Ⅹ目的意識も総じて高い評価を得ており、現況に喫緊の改善課題はなさそうです。実践共有を進めるならば、授業間の差がやや残るⅤ振り返りに焦点を据えるのが好適です。

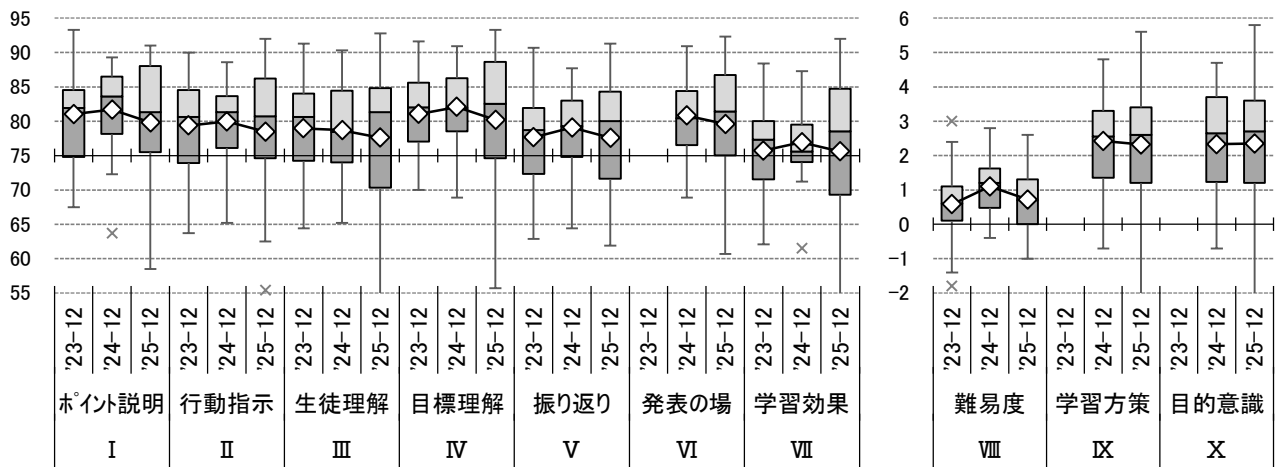
教養科学



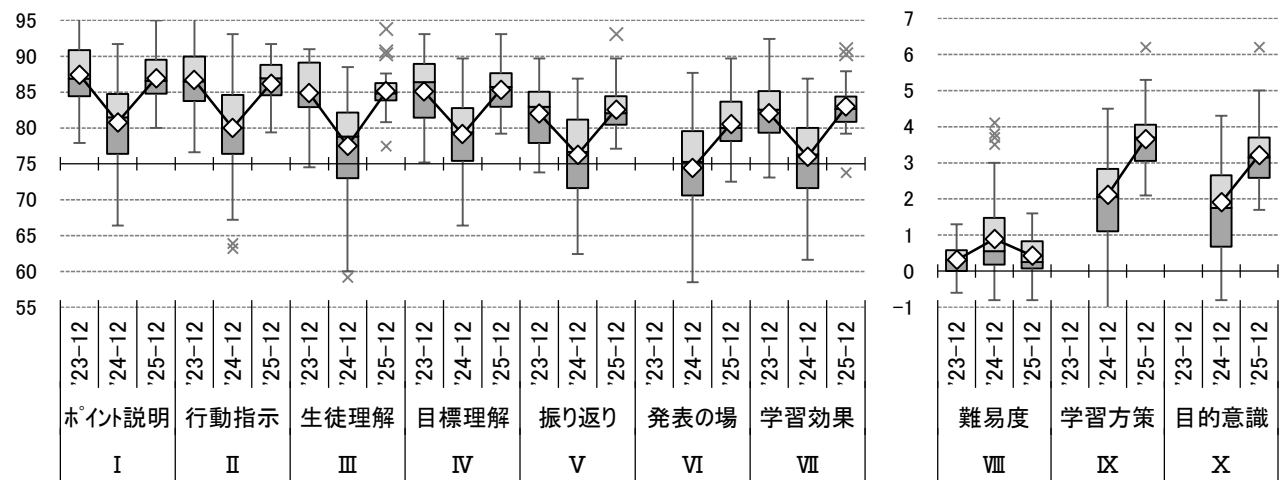
Ⅶ学習効果の75ポイント到達率は67%（一昨年15%、昨年25%）です。この2年間でかなり大きく改善が進みました。Ⅰ～Ⅵの各項目も昨年度までを顕著に上回るとともに、授業間の差も小さく収まっています。今後に向けた改善課題は、他項目より箱の位置が低いⅤ活用機会にありそうです。授業内外で学ばせたこと（形成した理解）にどんな課題で「生きて働く場」を与えるか、先生方の発想を持ち寄り、具体的な指導計画に起こしましょう。Ⅷ難易度の調整は、課題に取り組む中での「調べる、考える、まとめる」といったタスクの成果等を評価する際に用いる「基準」の書き換えによって図るのが好適です。

芸術（グラフは次ページ）

Ⅶ学習効果の75ポイント到達率は62%（一昨年56%、昨年54%）です。昨年度と比べて授業間の差が拡大しています。箱の上端（Ⅶ）は85ポイントに近く、Ⅴ振り返りも同様です。改善が遅れた授業では、{Ⅴ振り返り \geq 85、Ⅶ学習効果 \geq 85}の授業でのやり方を参考にキャッチアップを急ぎましょう。

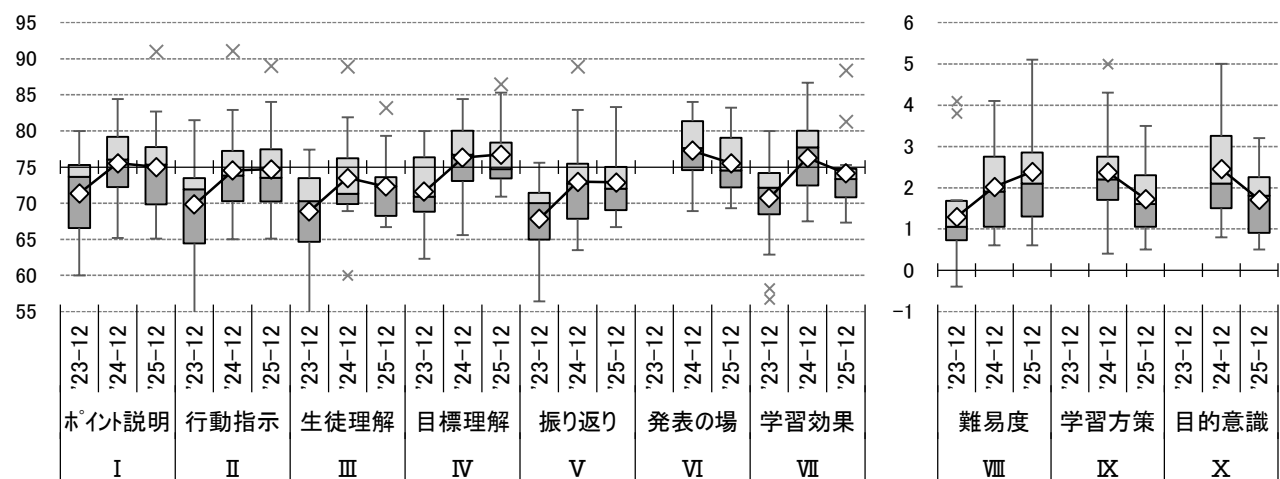


技術家庭／家庭



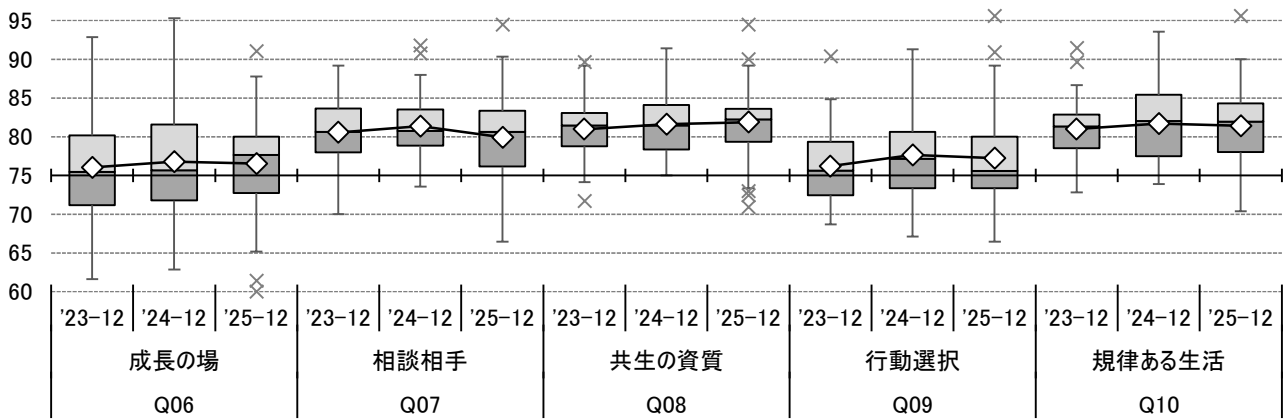
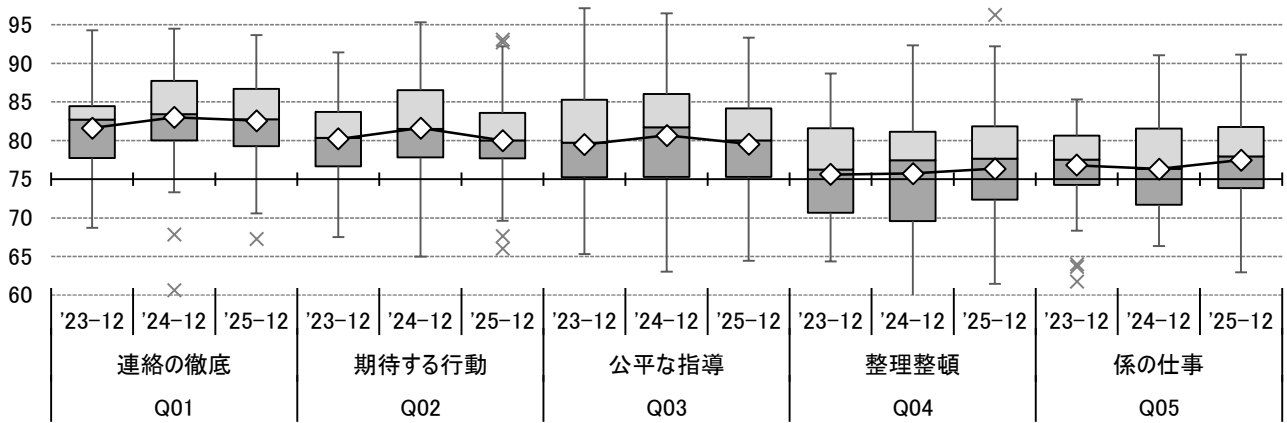
VII学習効果の75ポイント到達率は96%（一昨年93%、前回は63%）です。昨年度の低下から大きく回復しました。極端な未到達も見られず、現況に、教科としての喫緊の改善課題はなさそうです。

情報



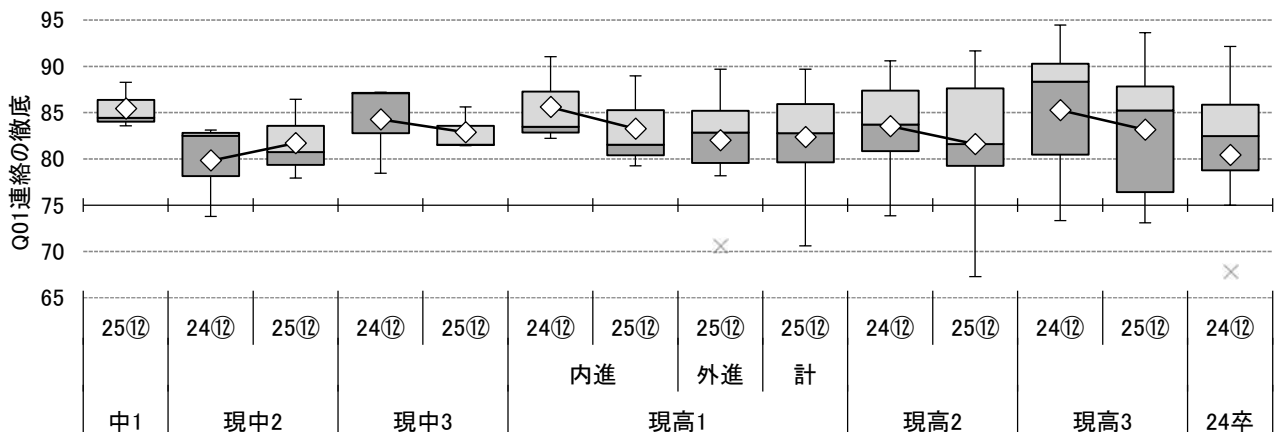
VII学習効果の75ポイント到達率は27%（一昨年18%、昨年53%）です。V振り返りが昨年と同等の水準を保つ中、IXとXが低下したのは、「振り返りの目的と方法が押さえられていなかった」ためと思われます。効果的な振り返り（前掲p.4参照）が鍵です。III生徒理解の改善を図るにも、振り返りに際して生徒が起こしたログを熟読し、生徒一人ひとりの「進捗と改善課題」を把握することが重要です。

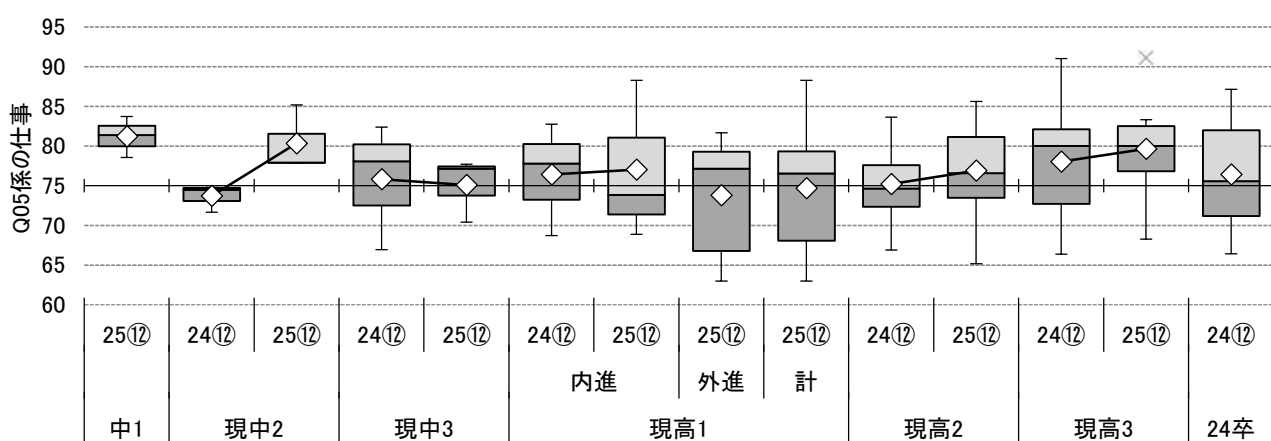
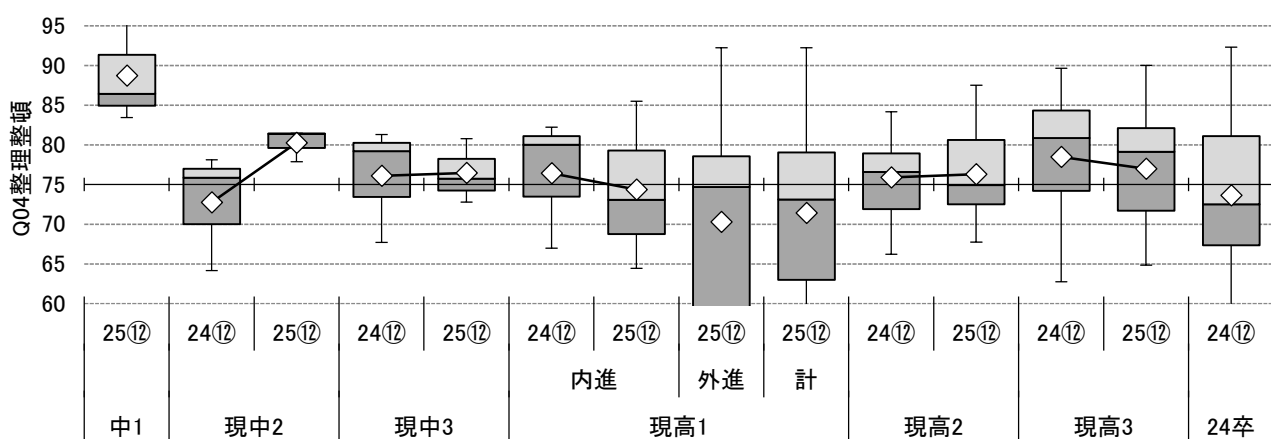
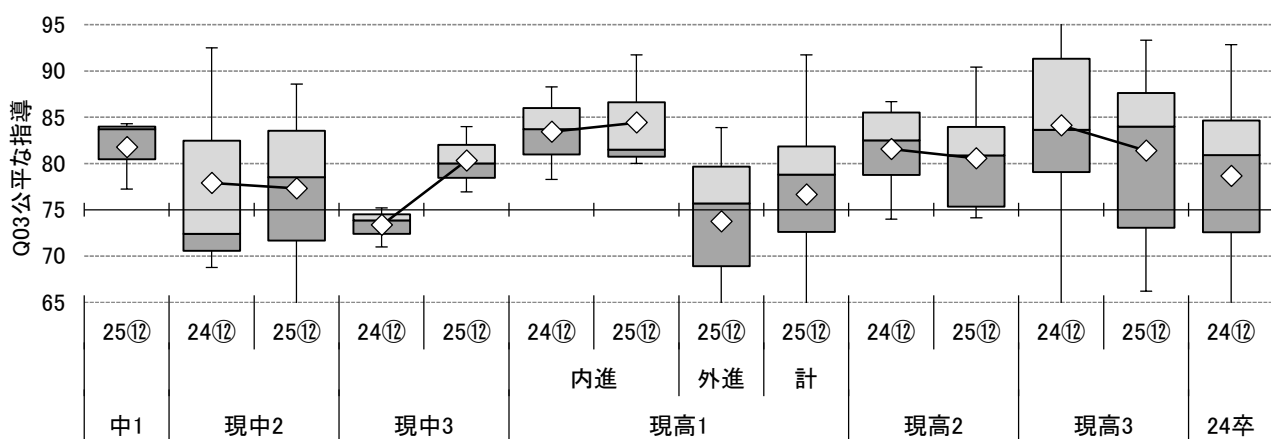
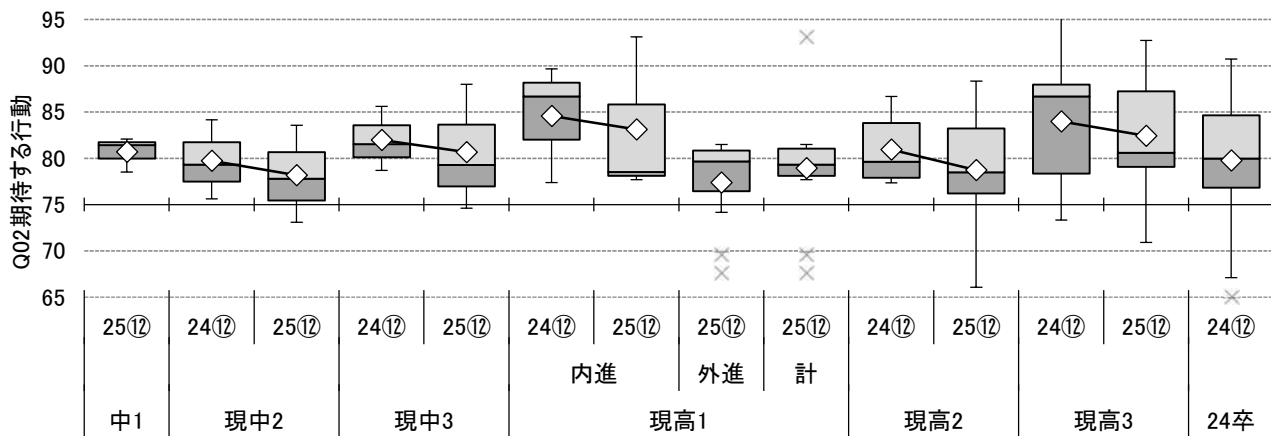
【ご参考】生徒意識アンケート（抜粋）

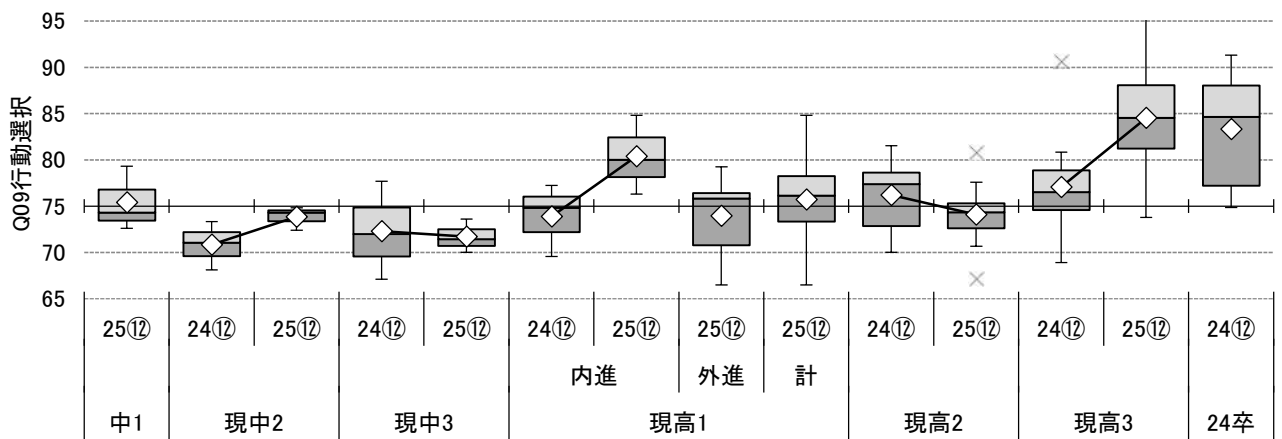
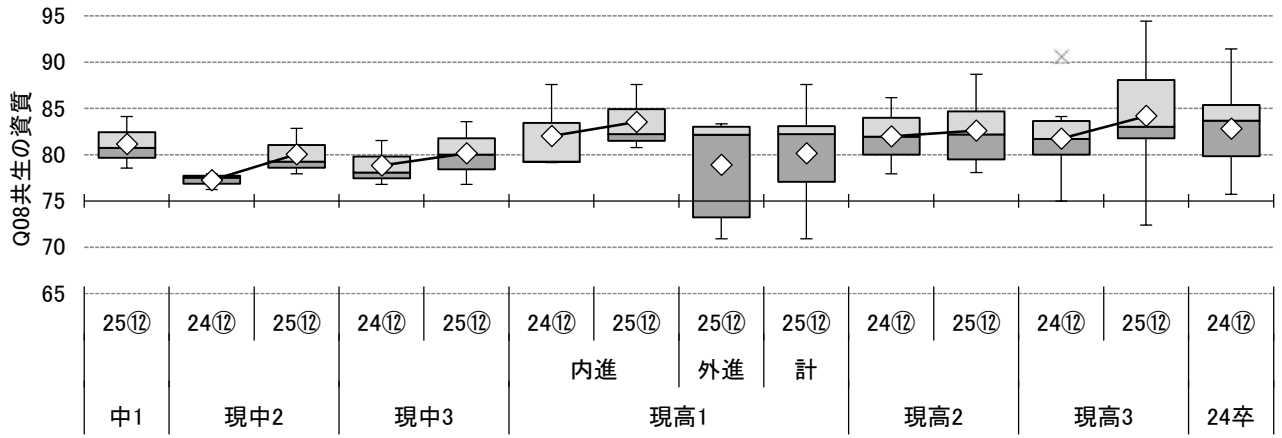
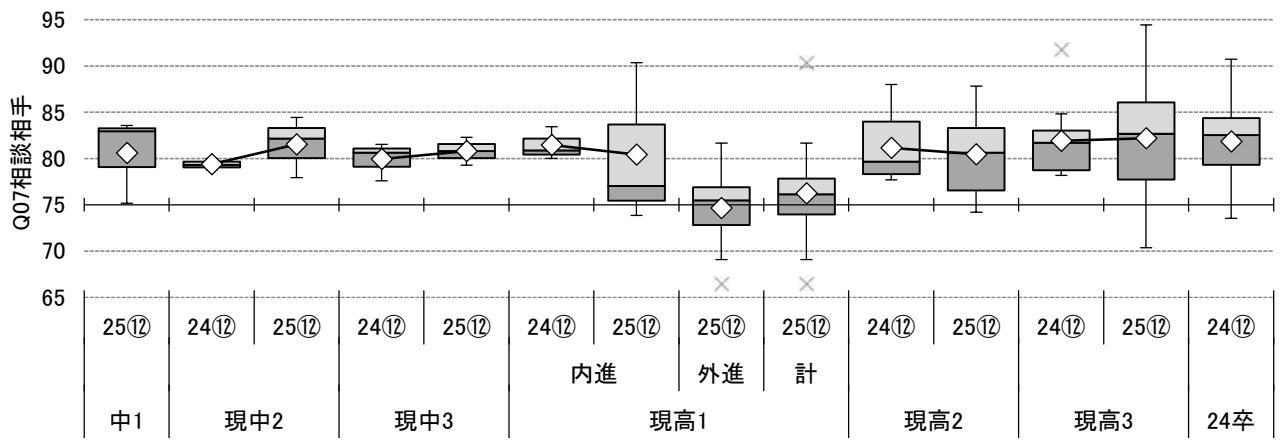
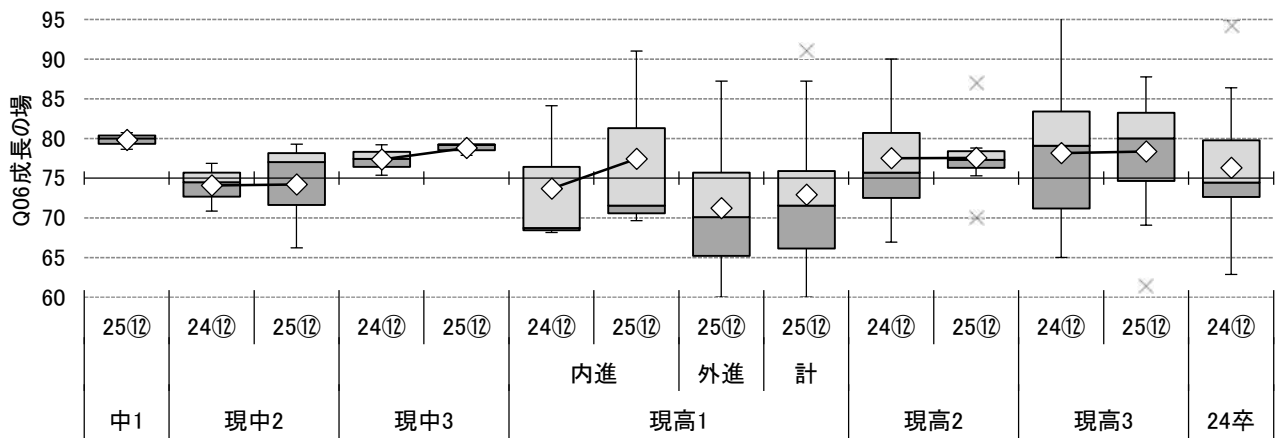


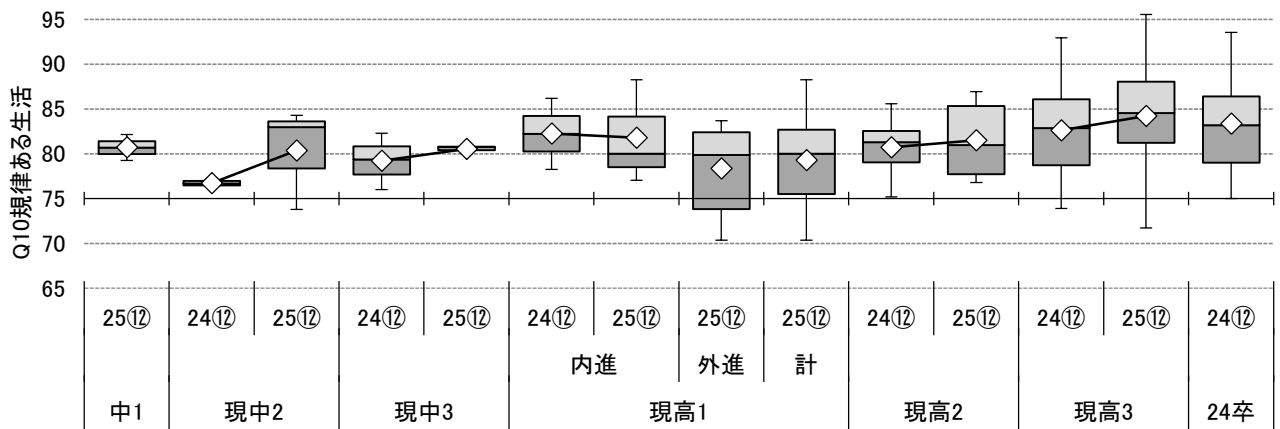
箱の下端（全校）が75ポイント未満に掛かっているのは、昨年と同様、Q04～Q06とQ09の4項目です。繰り返しになりますが、前3項目は強い相関で結ばれていますので、セットにした改善策を講じるのが好適です。「好ましい学習環境の創出と維持に、係の仕事で取りまわせる中で、協働性の獲得や相互理解の向上を図り、対話的な学び（気づきの交換による思考の深化、視野の拡充）の土台を整えましょう。Q09行動選択は、後掲の通り、中学と高2で中央値が75ポイントに届きません。特に高2は1年時から後退し、現高3と差がつかしました。時期（学年・学期）ごとに、生活・学習・進路の各領域で目指すべきこと（Q02）を明確に示した上で、それに照らした「振り返り」にしっかり取りまさせましょう。

- ・好ましい「成長の場」を成立させる要件 [Q06] (<https://fn-officef.com/blog/202410/20112/>)
- ・行動選択の力を養う指導と評価～生徒意識 [Q09] (<https://fn-officef.com/blog/202410/20194/>)









改善で遅れた項目での対処を考える場合は、「強い相関で結ばれた項目の改善も同時に図る」ように戦略を立てることが重要なのは、以前も申し上げた通りです。片方だけ改善を図っても、他方がボトルネックとなる場合があるからです。中学と高校では、相関の出方（下表）に多少の違いも見られます。

相関行列(中学)	Q01	Q02	Q03	Q04	Q05	Q06	Q07	Q08	Q09	Q10
Q01 【連絡の徹底】		.479	.427	.332	.341	.295	.323	.320	.210	.390
Q02 【期待する行動】	.479		.589	.355	.237	.336	.289	.372	.289	.401
Q03 【公平な指導】	.427	.589		.412	.266	.349	.311	.319	.189	.386
Q04 【整理整頓】	.332	.355	.412		.564	.297	.355	.296	.179	.368
Q05 【係の仕事】	.341	.237	.266	.564		.428	.369	.329	.305	.377
Q06 【成長の場】	.295	.336	.349	.297	.428		.396	.422	.315	.354
Q07 【相談相手】	.323	.289	.311	.355	.369	.396		.404	.323	.372
Q08 【共生の資質】	.320	.372	.319	.296	.329	.422	.404		.478	.549
Q09 【行動選択】	.210	.289	.189	.179	.305	.315	.323	.478		.452
Q10 【規律ある生活】	.390	.401	.386	.368	.377	.354	.372	.549	.452	

相関行列(高校)	Q01	Q02	Q03	Q04	Q05	Q06	Q07	Q08	Q09	Q10
Q01 【連絡の徹底】		.609	.497	.439	.451	.378	.427	.446	.414	.418
Q02 【期待する行動】	.609		.668	.472	.486	.481	.491	.536	.498	.496
Q03 【公平な指導】	.497	.668		.512	.493	.490	.461	.486	.422	.496
Q04 【整理整頓】	.439	.472	.512		.667	.597	.480	.509	.437	.457
Q05 【係の仕事】	.451	.486	.493	.667		.599	.503	.529	.487	.522
Q06 【成長の場】	.378	.481	.490	.597	.599		.575	.560	.498	.507
Q07 【相談相手】	.427	.491	.461	.480	.503	.575		.611	.499	.512
Q08 【共生の資質】	.446	.536	.486	.509	.529	.560	.611		.595	.680
Q09 【行動選択】	.414	.498	.422	.437	.487	.498	.499	.595		.615
Q10 【規律ある生活】	.418	.496	.496	.457	.522	.507	.512	.680	.615	

分析／文責：教育実践研究オフィスF 鍋島史一